倭国王も公認!?「纒向遺跡」の調査情報誌

纒向考古学通信

Vol. 4

≪発掘調査の概要≫

建物群南側の調査（纒向遺跡第 173 次調査）

1．はじめに

桜井市教育委員会では桜井市大字辻 48 番地と 41 番地で、纒向遺跡第 173 次調査を実施しました。この調査は一連の範囲確認調査では 5 回目の調査となります。これまでに引き続き土地所有者並びに地元関係者の方々より多大なるご協力を賜りました。まずこの場を借りて御礼申し上げます。

調査地は標高 75m 前後の扇状地上にあります。扇状地を細かく見ると、過去に河川が流れていてやや低いところ（旧河道）と、河川に削り残されたやや高いところ（微高地）にわけることができます。調査地は太田北微高地と呼んでいる東西に伸びる微高地上にあり、南北の旧河道からは 2 m ほど高くなっています。この微高地では庄内式期の遺構が多く見つかっていることから、これまでも注目を集めてきました（図 1）。

173 次調査では、これまでの調査地より南側で調査を行いました。173 次調査地の北側には庄内 3 式期以前に建物群が存在していたことがわかっており、その南側の状況を知ることが目的でした。なお、調査は平成 23 年 12 月 5 日から平成 24 年 3 月 26 日の間に行い、調査面積は 370㎡となります。

第 173 次調査地全景（北から）

2．検出された遺構と遺物

今回の調査では、168 次調査などで検出している建物群構築前の整地層は確認できず、地山層上面での遺構検出となりました。

検出された主な遺構としては、東西方向の溝（SD-1001）、南北方向の溝（SX-1001）、方形の落ち込み（SX-1003）や土坑（SK-1001、SK-1003、SK-1004）、ピット（小穴）などがあります。しかしいずれの遺構も建物群に伴う確証を得ることはできず、可能性のある遺構を検出するにとどまりました。

遺構の密度はこれまでの範囲確認調査で調査した範囲より低く、疎らにしか認められませんでした。これは浅い遺構が後世に削られた可能性と、当初から遺構の数が少なかった２通りの可能性が考えられます。173 次調査の遺構検出面は標高約 73.4m で、これまでの調査とほぼ同じ高さであるにもかかわらず遺構密度が低いことを考えると、後者の可能性も十分考えられます。

また、南側の谷部にも調査区を設けたところ、時期は不明ですが旧流路を確認しました。調査した場所は緩やかな流水による土層が厚く堆積しており、遺構・遺物は全く確認できませんでした。調査地は現状の地形でも微高地より１ｍほど低くなっており、過去に３世紀の遺構があったとしても既にこの旧流路に削られ谷部では残存していない可能性が高いと考えられます。

（１）建物群に伴う可能性のある遺構

今回の調査では主に３世紀と４世紀の遺構が検出されていますが、まず建物群に伴う可能性のある遺構について紹介していくこととしましょう。

ピット（小穴）列？

調査区の中央付近ではピット群を検出しています。このうちの一部がピット列として直線に並ぶ可能性があります。直線に並ぶピットは３基を検出しており、各ピット間の距離は約 2.9m をはかります。

仮にピット列とすれば、建物群の軸線とほぼ軸を同じくしています。ただし出土した遺物が土器の細片のみで時期を決める資料に欠けるため、検討の余地が残ります。

東西溝 SD-1001

東西溝 SD-1001 は調査区の南端を東西に走る幅 60㎝程の溝で、長さ６ｍ以上あることを確認しています。深さは平均して 10㎝ほどしか残っていませんでした。溝の上部は後世に削平を受けたものと考えられます。

溝の中からは庄内３式～布留０式の土器が細片になって出土しました。そのためこの時期に埋没したと考えられます。

建物群は庄内式期でも古相段階に造られ、庄内３式期に壊されたと考えられますので、仮にこの溝が埋まるまでの機能していた時期を長く見積もるのであれば、両者が併存していた可能性があります。ただし建物群の中軸線が真西に対して南へ 4°振るのに対して、SD-1001 は真西から北へ５°振っており、その方向が異なります。

ピット列、SD-1001 両者とも、現状では建物群に伴うかどうかはわかりません。今後の調査の成果をあわせて検討する必要が残ったといえるでしょう。

列となる可能性のあるピット群（東から）

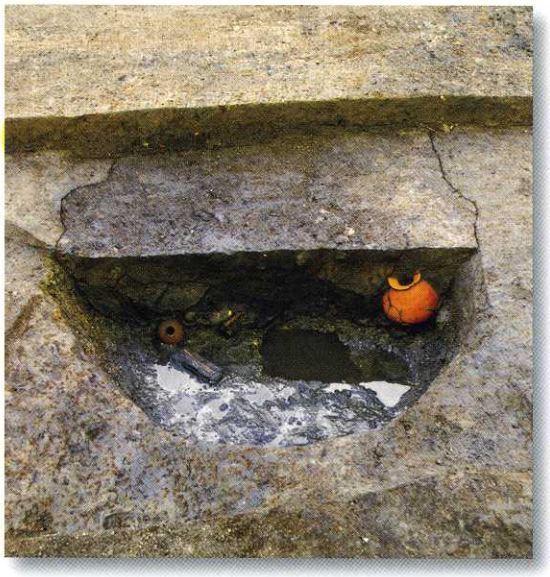
SD-1001（西から）

（2）その他の遺構

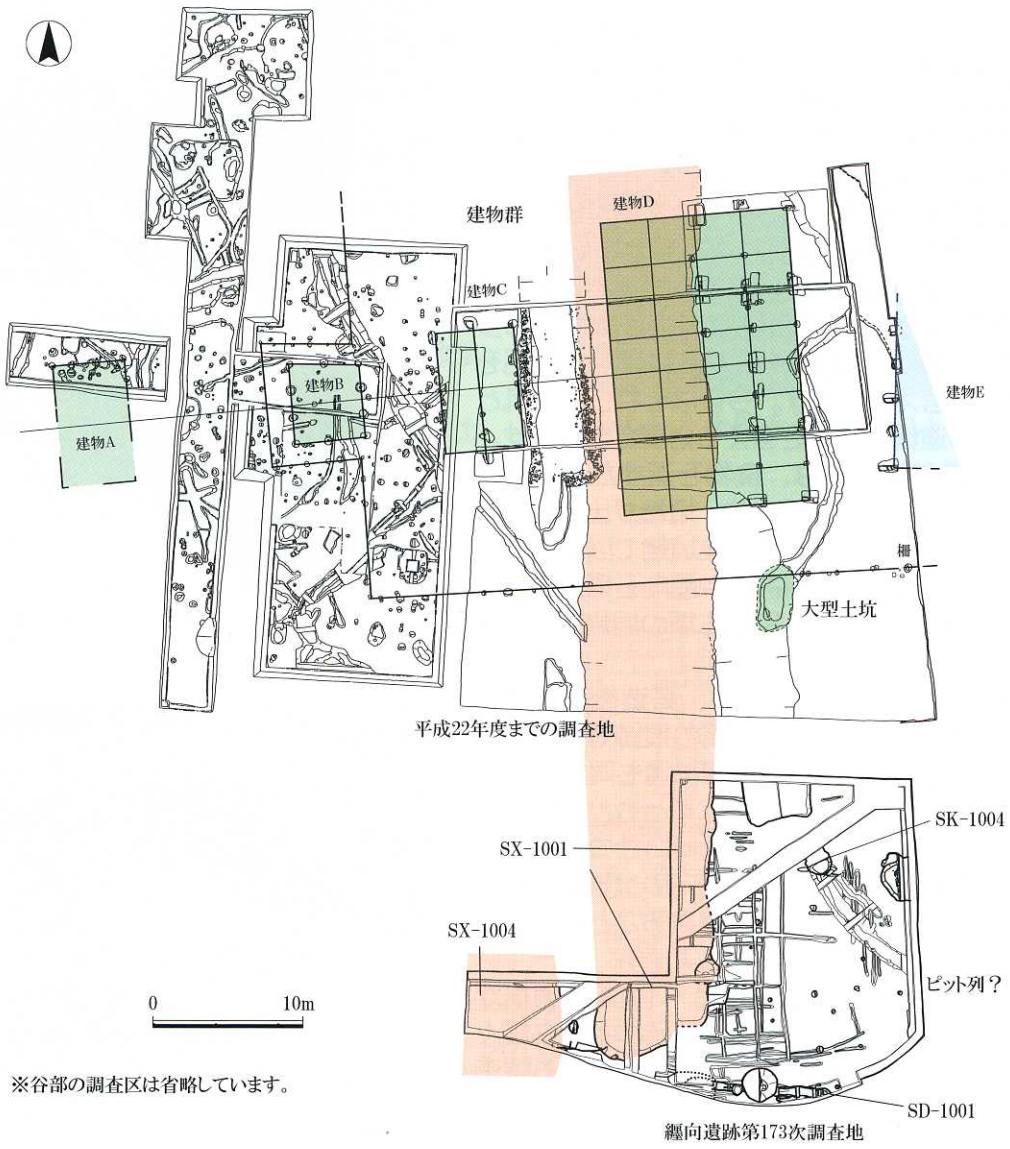
土坑 SK-1001、SK-1003、SK-1004 は 168 次調査で検出した大型土坑（SK-3001）とほぼ同時期のものです。土坑 SK-1004 からは、完形の土器やミニチュア土器が出土しています。纒向遺跡でもこの調査区周辺では祭祀に関わるような土坑が多く検出されており、これらとの関連が注目されます。

調査区の西側では、布留 2 ～ 3 式期に埋没した南北溝 SX-1001 を検出しています。幅約 8 m ある溝で、長さ 50m 以上続くことがわかっています。また、SX-1001 南端の西隣には SX-1004 が存在します。こちらも出土した土器から、同時期に埋没したと考えられます。SX-1001 と SX-1004 との間には盛土があり、両遺構を区切っていました。

纒向遺跡の中でも庄内式期の遺構が多く検出される辻地区ですが、布留式期でも新しい時期に下る大規模な遺構が検出されたことも、一連の範囲確認調査の大きな成果といえるでしょう。



SK-1004 遺物出土状況（南から）



※谷部の調査区は省略しています。

図 1　調査地の位置

3．まとめ

今回の調査では 168 次調査地の南隣、建物群の南側を調査し、遺構の様子をさぐることができました。順に知見を挙げていくと、

①今回の調査区のなかでは、確実な建物遺構は認められませんでした。後世の削平をどの程度見積もるかにもよりますが、調査区内には北側の建物群に匹敵するような大規模な建物はなかった可能性があるといえるでしょう。また、遺構密度が低いことは、調査地が空閑地であった可能性をも示唆するものです。

②建物群に関連する可能性がある遺構は、列となる可能性のあるピットと東西溝が挙げられますが、今回の調査範囲内ではいずれも確証を得ることができませんでした。今後の調査の成果とあわせて考える必要のあるものといえます。

今後も関係各位のご協力のもと、周辺地区の調査を推進し、居館域の構造や個々の遺構の性格を明らかにしていきたいと考えています。

（森　暢郎）

勝山古墳 - 纒向石塚古墳間の調査（纒向遺跡第 172 次調査）

纒向遺跡第 172 次調査は纒向石塚古墳、勝山古墳の中間地点、纒向小学校の北側でおこないました。纒向遺跡の中でも本調査区から大字辻一帯は庄内式期の遺構が集中する地区として知られています。３世紀に遡る建物群を検出して話題となった 166 次調査地からは西へ約 440m の地点となります。

この調査は長さ８m、幅６m ととても狭い範囲でしたが、５世紀頃の溝と３世紀頃の溝・土坑などがみつかりました。

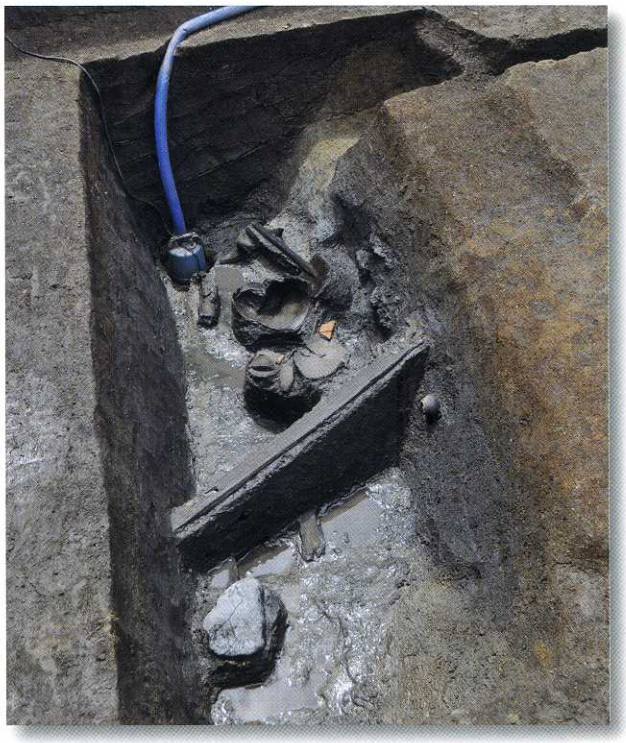
３世紀の溝・土坑からは、多くの土器が出土しています。土器は煮炊きに使われる甕や、貯蔵に用いられる壷が多数を占めています。周辺の調査では実用的でないミニチュア土器が出土した土坑も多く見つかっており、それらの土坑とは異なる性格を持っていたと考えられます。今後はそれらの土坑と比較しながら遺構の性格を考える必要があります。

５世紀の溝 SD01 からは、食物を蒸すために使った甑や、土を掘るための鋤の他、埴輪が出土しています。馬や人などの形をした形象埴輪ではなく筒形をした円筒埴輪です。勝山古墳や纒向石塚古墳には埴輪は認められないので、別の古墳の埴輪だったようです。

過去に行った周辺の調査では、築造後に耕作などによって壊されてしまった古墳の痕跡も見つかっているため、今回検出した５世紀の溝も同様に古墳に伴うものかもしれません。少なくとも、埴輪がみつかったことは 172 次調査地の近くにかつて古墳があったことをしめしています。纒向の土地は５世紀以降には人々の墓域として利用されることもあったようです。

纒向遺跡というと卑弥呼の時代、３世紀の遺構が注目を集めることが多いのですが、その他にも様々な時代の遺構・遺物が眠っていることがわかる調査でした。

（森　暢郎）



SD01　遺物出土状況（北から）

遺構完掘状況（北西から）

鉄器生産を示す遺物がみつかった調査（纒向遺跡第 174 次調査）

花粉の襲来もようやく終焉を迎える４月半ばに纒向遺跡第 174 次調査は始まりました。調査地は纒向石塚古墳の北東 200m、居館域の発掘調査地点からは北西に約 400m の地点です。この調査地の東側で行われた発掘調査では、古代や古墳時代の旧河道（埋まってしまった川の跡）が見つかっており、今回の調査地はその旧河道の延長上にあたっていました。そのような理由で、当初は遺構や遺物が纒向遺跡の中でも比較的少ない地域と考えていました。

しかし、重機で表土や耕作土を取り除くとあらわれたのは土器を多く含んだ真っ黒な土。纒向遺跡でこの土がみつかると、土器や遺構が見つかることが大きく期待されます。当初持っていた先入観を捨て、遺物や遺構の検出に励むことにしました。

調査の結果、浅い土坑や小規模な溝を検出したにすぎませんでしたが、約 60㎡の小さな調査範囲からコンテナケース 20 箱分の多量の遺物が出土しました。そのほとんどは纒向遺跡の最盛期である３世紀代のものです。

それらの遺物の中には、近辺で鉄器生産がおこなわれていたことを示す鞴（炉に空気を送り込む道具）の羽口や鉄滓、鉄片など特筆すべきものがありました。鉄器はその当時では貴重なもので、纒向遺跡の中でいつ・どのくらいの規模で鉄製品の生産が行われていたか解明していくことが今後必要になっていきます。

５月の半ばには発掘調査が終了し、現在は出土した遺物を整理し、そこから読み取れる人々の歴史について考えています。　　（丹羽　恵二）

第 174 次調査区全景（北から）

出土した土器を清掃しているところ

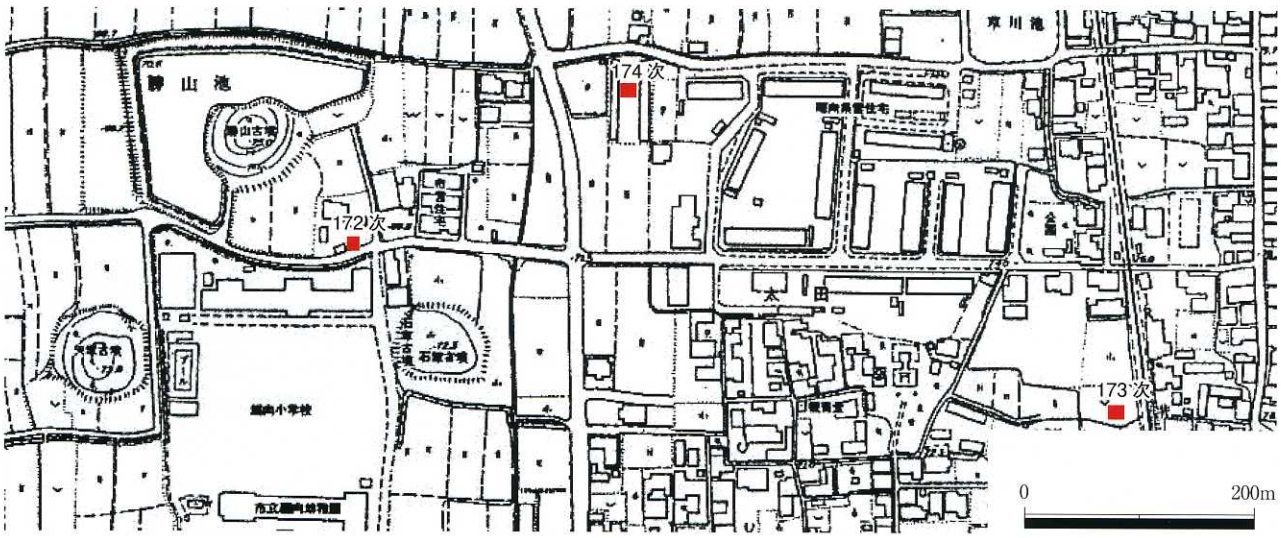


図２　発掘調査地の位置

《桜井市纒向学研究センターがオープンしました！》

平成 24 年 4 月に桜井市纒向学研究センターが設立されました。センターは、纒向遺跡とそれに関連する遺跡の調査・研究を行い、日本国家の起源及び文化の究明を通じて「纒向学」を確立し、遺跡の保存・活用に資することを目的として桜井市が設置したものです。

近年纒向遺跡への関心は高まっており、寺澤薫先生を招聘し纒向学研究センターの設立を目指してきました。

現在は範囲確認調査で出土した遺物の整理作業や、これまでの未報告の調査地の報告書作りなどをおこない、纒向遺跡の実態解明にあたっています。

また、今後は纒向遺跡についての講座や公開講演会を開くなど、纒向遺跡の魅力や重要性を広く情報発信するとともに、遺跡の保護も目指していきたいとおもいます。

看板を掲げる松井市長と寺澤所長

《纒向石塚古墳の報告書が刊行されました!!》

纒向石塚古墳は纒向遺跡に点在する最古級の前方後円墳のひとつで、「纒向型前方後円墳」の典型的な例と考えられている古墳です。墳丘は戦時中に大きく削られていましたが、周濠などから豊富な土器や弧文円板など特殊な遺物が出土しており、注目を集めています。この纒向石塚古墳では昭和 46 年の第 1 次調査以来、9 回の発掘調査が実施されてきました。

これまで一部調査の概要を示した報告書が刊行されていましたが、すべての調査を包括的に示した報告書はありませんでした。

そのためこの古墳をめぐっては、弥生時代の最後の時期の墳丘墓と考えるのか、あるいは古墳時代の最初期の古墳と考えるのかといった議論が交わされてきたものの、議論の土台となる資料に限界がありました。

今回、正報告書が刊行されたことで、ますます議論が活発になることが期待されます。

纒向石塚古墳（上が西）

《小川塚西・東、サシコマ古墳の測量調査》

纒向遺跡の中に点在する古墳である、小川塚東、小川塚西、サシコマ古墳の測量調査を行いました。

纒向遺跡には箸墓古墳のほか、大小様々な古墳が存在します。これらの古墳の中には、測量調査や発掘調査がなされておらず、時期や墳形が未だにわかっていないものも存在します。

箸墓古墳の北東約 450m、巻野内地区にある小川塚東、小川塚西、サシコマ古墳は天理大学考古学研究会により測量調査がなされているものの、国土座標に位置づけられておらず周辺にあるホケノ山古墳や巻野内石塚古墳との正確な位置関係が不明瞭だったため、改めて測量調査を行いうこととしました。

測量成果の整理・報告は今後の課題ですが、整理が終わり次第、ご報告したいと考えています。

小川塚西古墳（南西から）

纒向遺跡第173次・茅原大墓古墳第5次調査現地説明会を開催しました！

纒向遺跡第 173 次調査・茅原大墓古墳第 5 次調査の現地説明会が平成 24 年 2 月 18 日に開催されました。今回は桜井市教育委員会が重要な遺跡を並行して調査していたため、同時に現地説明会を開催する運びとなりました。

当日は生憎寒風が吹き、時折雪も混じる悪天候でしたが、両遺跡で延べ 1600 人と多くの方にお越しいただきました。

現地説明会に来られた方々には出土した遺物や遺構の説明を聞いていただきました。現地表面からわずか数十 cm で古墳時代の遺構に到達することに驚かれている様子でした。

両遺跡は 2 キロほど離れていますが、間をハイキングして当時に思いを馳せられた方も多かったようです。

現地説明会の風景

《卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金を活用し測量機器を導入しました》

皆様からの卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金を活用し、桜井市教育委員会では測量機器（トータルステーション）を導入しました。この測量機器は光の反射を用いて距離や角度を算出するもので、遠く離れた地点でもミリメートル単位での細かな測量が可能となります。纒向遺跡第 173 次調査以降の測量で活用しています。

遺構や遺物の正確な位置関係を把握することは、発掘調査やその後の報告にとって非常に重要なことですので、この測量機器をつかって良い成果を上げていきたいと思います。

写真は調査の担当者がトータルステーションの取り扱いについて説明を受けているところです。

導入した測量機器

《桜井ライオンズクラブ様よりプロジェクターを寄贈頂きました》

桜井ライオンズクラブ様より桜井市教育委員会にプロジェクターを寄贈いただきました。平成 24 年 3 月贈呈式が行われ、会長より雀部教育長が受け取りました。

写真は寄贈いただいたプロジェクターを使って、桜井市内の小学校で行った出前授業の様子です。発掘調査時の映像や現地説明会の風景など、子どもたちは熱心に見入っている様子でした。

今後も纒向遺跡の周知を含めて、桜井市の文化財の普及・啓発など様々な場面で活用したいと思います。

出前授業の様子

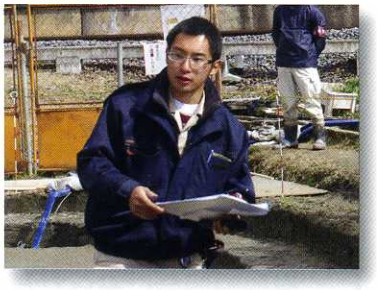
《報告書作り着々と進行中 !!》

これまでに発掘調査を行い、建物跡の存在が明らかとなった範囲確認調査の報告書作りも着々と進んでいます。報道や纒向考古学通信などで調査の概要をご存じの方は多いと思いますが、出土遺物の検討を行ったり、図上で遺構の再検討をすることで新たにわかることも多くあります。写真は遺物を実測しているところです。

報告書が刊行されしだい、またお知らせしたいとおもいます。

土器実測の様子

《纒向遺跡を掘る調査員たち３》



桜井市の調査員の紹介コーナーです。このコーナーでは、普段はあまり知ることのない発掘調査や報告書の作成に携わっている人々について紹介しています。第２号で紹介した福家くんは京都府内で文化財行政に携わることとなったため、かわりに調査に関わることとなった、森くん、杉山さんを紹介します。

森　暢郎（もり　のぶろう）

奈良県出身です。ご縁があり平成 23 年 4 月から桜井市教育委員会で働くこととなりました。纒向遺跡では今回紹介した 172 次調査、173 次調査の現場に立つこととなりました。調査現場では周囲の方にご迷惑をおかけすることも多く、まだまだ修行途中です。現在は整理作業や広報に携わっています。よろしくお願いいたします。

杉山真由美（すぎやま　まゆみ）

今年から桜井市でお世話になっております。私の出身は関東で、京都の大学に通い、大学卒業後は兵庫で少し働き…あっちこっち行って奈良県の桜井市に辿りつきました。桜井市には考古学の勉強を通して見聞きしたことのある有名な遺跡が多くあるということもあって、こちらで文化財に関わる仕事をすることを光栄に思いながらも少し緊張しています。よろしくお願いいたします。

埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成 24 年 9 月 30 日（日）までの期間、『発掘調査速報展 18　50cm下の桜井』として平成 23 年度に桜井市内で行った発掘調査の速報展示を行っています。

本号でご紹介した纒向遺跡 172 次調査・173 次調査出土の遺物の他、国内最古の勅願寺である百済大寺に比定される吉備池廃寺関連の遺物、紅葉の名所談山神社から出土した五鈷杵や輪宝のような密教系の遺物や、長谷寺から出土した四耳壺など、桜井市内にある古社寺・廃寺に関連する遺物が充実した展示となっておりますので、ぜひご観覧頂きますようお願いいたします。

開館時間 9:00 ～ 16:30　休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日　7 月 18 日（水）・9 月 19 日（水）（祝日は開館いたします。）入館料 / 大人 200 円 小・中学生 /100 円　20 名以上の団体は大人 150 円 小・中学生 50 円）

刊行物のご案内

埋蔵文化財センターでは纒向遺跡をもっと知りたい方のために以下の図書を頒布しています。

ガイドマップ『改訂第 4 版 纒向へいこう！』200 円 (2011 年 2 月に新版を刊行しました。)

※ご購入方法は　桜井市立埋蔵文化財センター内　㈶桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先　TEL 0744-42-6005　FAX 0744-42-1366

編集後記

今年度より桜井市纒向学研究センターが開設されたことに伴い、纒向考古学通信も新体制で発行することとなりました。今回は平成 23 年度に調査した纒向遺跡第 173 次調査を中心に纒向遺跡に関するニュースをお届けしました。今後も調査の成果に目が離せない纒向遺跡ですが、今年はどのような成果が上がるのでしょうか？　(M)

纒向考古学通信　Vol.4

発行　平成 24 年 9 月 1 日

編集　桜井市纒向学研究センター

〒 633-0085 奈良県桜井市東田 339

ＴＥＬ 0744 － 45 － 0590

ＦＡＸ 0744 － 45 － 0590

ホームページ開設しました。

纒向学研究センターで検索！

纒向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成しています。